

タンチョウのえさづくりプロジェクトの概略

タンチョウ コミュニティ

タンチョウの保護活動は 1950 年代の地域住民による自主的な給餌活動に端を発し、地域住民の深いかかわりを持って続けられました。その後 1962 年には北海道が、1993 年には国が冬季給餌活動を事業として支えるようになり、タンチョウ保護事業の安定化が図られました。これらの活動の結果、2000 年代には生息個体数 1,000 羽超が確認されるまでになりました。しかし一方で、タンチョウが数多く生息する地域では当たり前のよう存在することからタンチョウ保護に対する無関心層の拡大が懸念され、また繁殖環境の不足などから酪農地帯に生息するタンチョウが増加し、食害の問題を引き起こすなど、タンチョウ保護事業のあり方に疑問を抱く層も増加傾向にあります。個体数が回復したとはいえ、冬季給餌の今後のあり方、繁殖環境の不足、地域住民との摩擦などタンチョウ保護に関わる問題は山積みで、タンチョウの未来は決して安泰とは言えません。国の事業にも限界があり、今後のタンチョウ保護や地域住民との共生にあたっては、地方自治体や地域住民の主体的な関わりが求められています。本活動は、地域住民のタンチョウへの興味関心やタンチョウ保護活動への意識を高めるとともに、地域交流の場を創出するなど、無理なくタンチョウ保護に関われるしくみを作ることを目的に行っています。

活動内容は、タンチョウの冬季給餌用のえさとするデントコーンを地域住民の協働で作製、給餌用のえさに活用するものです。趣旨に賛同いただいた酪農家（5 軒）にデントコーン畑を提供いただき、種まき、雑草抜き、収穫などの畑作業は地域の子どもたちや住民（小学校 2 校・中学校 1 校、地域団体 2 団体）が行いました。できあがったえさは給餌活動をする村内のタンチョウ保護施設や学校で活用しました。学校活動では、タンチョウ学習会を実施し、給餌の問題点や給餌以外に必要な保護活動について学ぶ機会を作りました。作業にあたっては、学校と地域団体と合同で行うなど、地域交流の場を作りました。また、本活動を広く PR するために活動の様子を動画編集し DVD を制作したほか、他地域の子どもたちとの交流イベントに参加し、活動の紹介をしました。

参加した酪農家や地域住民からは、子どもたちとふれあう機会や酪農業を知ってもらう機会として、学校からは子どもたちが地域の特色を知り、地域住民との交流や地域貢献につながる機会として評価いただいています。タンチョウ保護施設からは、地域住民がタンチョウと触れ合う機会として評価いただいています。交流イベントでは、他地域の自然や活動を学び、参加した他地域の子どもとの交流を深める機会にもなりました。

今後も本活動を継続するとともに、新たに参加する酪農家や学校、団体などを積極的に受け入れていきたいと考えています。



種まき活動（小学生）



収穫活動（女性団体）



コーンほぐし活動（小学生と女性団体合同）